日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

信仰万能
――マルコ伝第9章14～29節――

１９６５年１月24日
小池辰雄

変貌のキリスト　ああ信なき代なるかな　信ずる者には何でもできる　信仰なき我を助け給え
托身　一粒の麦　絶信の信　キリストの愛の本願　信楽　聖名によって命ずる　祈り心地

【マルコ9・14～29】

14相共に弟子たちの許に来りて、大なる群衆の之を環り、学者たちの之と
論じいたるを見給う。15群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に
走り往きて礼をなせり。16イエス問い給う『なんじら何を彼らと論ずるか』
17群衆のうちの一人こたう『師よ、唖の霊に憑かれたる我が子を御許に連れ
来れり。18霊いずこにても彼に憑けば、痙攣け泡をふき、歯をくいしばり、
而して痩せ衰う。御弟子たちに之を逐い出すことを請いたれど能わざりき』
19爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、
何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』20乃ち連れきたる。
彼イエスを見しとき、霊ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきて
転び廻る。21イエスその父に問い給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『お
さなき時よりなり。22霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさん
とせり。然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』23イエス言いた
もう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』24そ
の子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』25イエス
群衆の走り集るを見て、穢れし霊を禁めて言いたもう『唖にて聾者なる霊よ、
我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』26霊さけびて甚だしく
痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死
にたりと言う。27イエスその手を執りて起こし給えば立てり。28イエス家に入
り給いしとき、弟子たち窃に問う『我等いかなれば逐い出し得ざりしか』29
答え給う『この類は祈りに由らざれば、如何にすとも出でざるなり』

●変貌のキリスト

今日はマルコ伝9章14節から29節までです。並行記事としては、マタイ伝17章14～21節、

ルカ伝９章37～43節で、共観福音書のいずれにおいても出てますが、しかし、マルコ伝の方が一番詳しいようです。癲癇（てんかん）病患者を治されたという、劇的な場面が展開しているところです。

14相共に弟子たちの許に来りて、大なる群衆の之を環（めぐ）り、学者たちの之と論じいたるを見給う。

口語訳では、

「**14さて、彼らがほかの弟子たちの所にきて見ると、大ぜいの群衆が弟子たちを取り囲み、そして律法学者たちが彼らと論じ合っていた。**」

口語訳の方がはっきりと分かるように訳してある。変貌の山からイエスとペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人がおりてこられた。そこで、他の弟子たちと群衆がこういうわけですから。

15群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて礼をなせり。

口語訳では、

「**15群衆はみな、すぐイエスを見つけて、非常に驚き、駆け寄ってきて、あいさつをした。**」

「あいさつをした」はちょっと訳が弱い。

「礼をなせり」

と、むしろ平伏したような意味です。なぜ、これは驚いたんでしょうかね。誰でも、分かる人は手をあげてください。学校じゃないけれども。これが分からないと困るんですね。

私は体験があるから、ここを読んで、なぜ「驚いた」かが分かる。私は阿蘇で祈りの深い集会をして、熊本の少し南の小川という所でお話をしたことがある。また、八溝（やみぞ）山で深い祈りをしたあとで、郡山の少し南の方の療養所でお話をしたことがある。その時に、

「先生の顔が前とはちがう」

と言われた。

キリストが変貌の山に行って、本当に彼は変貌されて、神の光に貫かれ浸透されて、弟子たちもそこに平伏してしまった。そういう事態をもって、キリストは特別に光をおびて、山から下りてこられたので、み姿が違うわけです。正に光を放っている。それだから、この人たちがみな驚いた。

「これはちょっと普通と様子が違う」

と言う。

そうなんでありまして、私が話をしていると、私の後ろに光が射していたことを二、三の人が見たという。私は何ものでもありません。けれども、徹夜をして祈るような深い祈りの後というものは――八溝山でも三日断食して祈りましたから――そういうような時には凄く、電気でいうと荷電されて、もの凄くボルトが強いわけです。霊的な次元が高まっていますから、お話をしているうちに、御霊の力に打たれて、ぶっ倒れるような人が出てき

てしまう。そういうようなことが時たま起こるものです。ここのところも、

15**群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、**

というのは、正にそういったキリストにでっくわしたからです。

御許に走り往きて礼をなせり。

拝むがごとくに拝したわけです。「挨拶をした」くらいな表現では、ちょっと実はまにあわない。そういうところが、翻訳者たちが本当にキリストの現実をつかまえていないから困る。皆さんは、なにもギリシャ語やヘブライ語をおできになる必要はない。ギリシャ語やヘブライ語がたとえできたって、それは分からん。問題は、いつも文字の奥に――

「儀文は殺し、霊は活かす」

というが――霊をもって読まなくてはいかん。そうすると、聖書のいわゆる文字以上のことを皆さんはどしどし読み込んで、実は聖書が呻いているところの事態、叫んでいるところの事態を聴くことができる。

●ああ信なき代なるかな

16**イエス問い給う『なんじら何を彼らと論ずるか』**

とにかく癲癇病者がどうにもならないものですから、なんだかんだと議論をしたり、またいろいろ工夫したりしても、ダメなわけです。

17**群衆のうちの一人こたう『師よ、唖の霊に憑かれたる我が子を御許に連れ来れり。**18**霊いずこにても彼に憑けば、痙攣け泡をふき、歯をくいしばり、而して痩せ衰う。**

私はかつて、信仰に入らない前ですけれども、癲癇の人を見たことがある。実に凄いものですね。もの凄いほどの力を持っていますから、ちょっとやそっとでは押さえつけられない。そういうような始末でどうにもならんと。

御弟子たちに之を逐い出すことを請いたれど能わざりき』

他の弟子たちはそれができなかった。

19**爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』**

「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか」

と。キリストがエルサレムをオリーブの山の上から見られて嘆かれた。十字架に架かる少し前です。ここでも、

「ああ、なんと不信仰な時代であろう」

と。このキリストの嘆きは今もひしひしと迫る次第です。

私もとにかく、ちょうど20歳のときに信仰に入りましたが、それから40年。また、学校

で青年諸君を相手にしだしてから35年。機(おり)に触れ時に応じて、私はもう何万人の学生諸君にこの福音の事態を語ってきたかわからない。興味はある程度感ずるんです、みんな。けれども、一線を乗り越えることをしない。内村鑑三先生がその臨終の少し前に、

「もう、私はこんな国には愛想をつかした。みなにそう言ってくれ」

と言われた言葉があるそうですが。実際、愛想をつかす。

「ああ、われ曠野に宿りを得んものを」

と、エレミヤも曠野に行きたくなった。また、藤井武先生はもう匙(さじ)を投げて、

「こんな国は亡びてしまえ」

というようなわけで、「亡びよ」なんていう烈しい詩をつくってみたり。本当に愛する人は、またそこに悲憤を感ずるわけです。

「ああ信なき代(よ)なるかな」

と。愛すればこその嘆きです。

S医専、S医科大学で私の声を聞いて飛び込んできたのは、今司会をしたN君と、熊本で大いに働いて今は東京でやってますが、S君。それからI君。この三人が私の声に応じて立ち上がった大事な青年諸君です。その他、T大、またW大――いちいちお名前は申しませんが――幾人かおられますけれども、それは実に暁の星よりも少ない。また、来たかと思うと去ってしまう。去ったって構いませんけれども。しかし、本当の信仰を得てくれればいい。私は決して手前味噌を言っているのではないので、この信の道は年がたつにつれて、私には確信がいよいよ明らかとされていきます。絶対に一歩もこの道からは退くわけには参りません。

●信ずる者には何でもできる

「何という不信仰な時代であろう。いつまで私はお前たちと一緒におられようか。我慢ができないぞ」

とキリストも嘆かれた。また、弟子たちはどうにもならん。イエスはそのことも分かっておられる。

「しかし、私は死んでから、十字架の死を遂げてから、今度は御霊をもって臨むから。そうしたら、お前たちの幾人かは本当に立ち上がるぞ」

と、こういうわけです。

伝道者というものはみな、そういった一種の十字架を負わされる。そして、躓いたり転んだしても、本当にキリストに立ち向かってくる人は、やっぱりどこまでも続いていきますが、ただ直接的に先生に直結しているような人たちは、よさそうだが、却ってどこかで必ず躓いてしまう。我々の関係は、キリストを通しての関係であって、人間直接の関係ではありません。

そのような嘆きをキリストは発せられた。即ち、彼らは本当の信仰をもっていない。信仰らしいものはあるようだが、それはまだ本当の信の世界ではない。信仰らしきところのクリスチャンはたくさんいます。キルケゴールが

「本当のクリスチャンは天才よりも少ない」

と言いましたが、確かにそうかもしれません。けれどもまた、本当のクリスチャンは何ものよりも多くありうるのです。何か人間の側の資格や条件というものが要らないんですから。天才は大いに資格や条件がいります。けれども、この信仰の世界は絶対無条件の世界です。その絶対無条件が受けとられないので困る。今日は、そういう意味において、非常に大事なところです。

相手が癲癇の騒ぎなものですから、

「癲癇病なんてのは滅多にない。まぁ、こんなところはそう我々に関係ないな」

なんて思って読んだら、おしまいです。福音書のいかなる現実も、我々にもの凄い関係をもっている。第一、人間なんてものはまことに当てにならないものです。ひとたび精神がおかしくなったら、もうどうにもならん。

20乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、霊ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきて転び廻る。

キリストのような霊人にぶつかりますと、却って悪霊が、他の霊が騒ぐ。マルコ伝5章のあたりにも出ている。あれも悪霊がとりついた人です。

「私をなぜ責めなさる」

と言って、向こうが恐がる。

「神の子よ」

と言って、普通の人よりもはっきりと、キリストが神の子であることを――ペテロの告白以前にですよ――ちゃんと悪霊の方が、キリストが神の子であることを知っている。

21イエスその父に問い給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『おさなき時よりなり。22霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさんとせり。然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』

「為し得ば」なんて、仮定法でキリストに言ったものですから、

23イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』

非常に断定的な言葉ですね。ギリシャ語でたった四字です。

「**一切のことを為し得る、信ずる者には**」

と。そこで、この一句のゆえに、私は「信仰万能」という題を今日は掲げた。

「信ずる者には何でもできる」

と。

「でも、こういった場合があるじゃないですか」

なんて、そう思う人はもう信仰から一歩退いている人です。現実には、そういう場合もあるでしょう。けれども、場合を考えているような、第一歩であったらダメなんです。場合というものは、我々のこの罪の現実がつくるのであって、罪なき現実においては、場合なんてものはありはしない。罪の現実において、罪なき現実を受けとって、そして、現象面はとにかくも、申し上げているとおり、根源現象（ウルフェノメノン）の面において絶対にこれを受けとっていかなければダメです。でなければ、本当の力の世界には入れない。キリストは何か条件付けでものを言わない。いつも断言命法で言われる。ここにその秘訣があるわけです。

「信ずる者にはすべてのことが為し得られる」

と。はっきりそのとおりです。

●信仰なき我を助け給え

24**その子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』**

このキリストの言葉と、このお父さんの言葉。この二つが非常に大事なんです。もうここに、この二つの言葉の中に信仰の秘訣がある。

「われ信ず、信仰なき我を助け給え」

という。「信仰」という言葉は、ギリシャ語で「ピスティス」という言葉です。ドイツ語では「グラウベ」、英語で「ビリーブ」という。内村先生が信仰のことを解説した言葉に――『宗教と文化』の文章の中に書いておきましたが――

「信仰は或る事柄を信ずるのではなくして、に信ずる、に信頼する、相手に信頼することである。」

と。人間の関係はこの「信」という字です。友人関係、師弟関係というものは、「信実」というのはドイツ語の「トロイエ」、心が変わらないことです。変心しないこと、裏切らないこと、策略をもちいないこと。信頼関係です。ブルンナーさんが『ローマ書註解』の中で信仰のことを書いているところがありますが、「人と人との信、信頼関係」です。

神は「まこと」（真、信、誠）である。キリストはまことであるが、私たちはそのまことが貫かれないところに、我々人間の不信仰、不信頼があるわけです。イスラエルの民がヤーヴェーの神に対して、このトロイエを、信仰を、ピスティスを――ヘブライ語では「エメツ」「アーメン」です、「アーメン」という言葉がそういう言葉なんです――アーメンを貫きえなくて、諸々の偶像を拝んでしまった。これがイスラエルの不信で、その果としてとうとう北イスラエルと南ユダの両国が亡びた。その亡びていくときに、預言者たちがこの信仰の回復を叫んだんですが、どうにもならない。

そういうわけで、信仰は本来、

「に信頼する、に任せる。に自分の身を托身（たくしん）する」
ことです。「托身」と言っても、ただ身体ということではない。全存在を委ねること。相手に自分を全部ぶちまかせているのが信ということです。人間関係でそれをやったら、馬鹿をみることがたくさんあるかもしれません。馬鹿をみても、そのようにして馬鹿正直な人が本当は神さまに愛されている。

小さな子どもが母親に信頼している。これは絶対無条件です、小さい子どもが母親に対しては。だから、キリストの、

「**幼児（おさなご）のごとくならずば**」

という言葉のとおりです。あの幼児のごとき托身の態勢にならなければ、神の国には入れない。信仰ということがなにか、或る信仰箇条を信じてみたり、イエスが神の子であるという事柄を信じてみたりということではどうにもならんですよ。別に悪くはないけれども、それは力でも何でもない。生命でも何でもない。ところが、そういった切り変えられたような、命題的な信仰がたくさんある。そして、「聖書研究、研究」とやっている。そんなのはしまいに頭も心も魂も疲れてしまう。

●托身

イエスが言われるこの

「**信ずる者には**」

というのは、その相手なる神に托身して一切を任せる。キリストは、神を信ずるとなったら、神さまのその全知、全能、全愛というものに全面的に任せる。

「**心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、精神を尽くして汝の神を愛すべし**」

と言うでしょ。全部、「尽くして」と、自分を神の中に任せる。神の中にとっぷり棄ててしまう。

『心尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、精神を尽くして』なんて大変だな。そんなに尽くせるかな」

なんて言って、

「私は何％できただろうか」

なんて、そんなことをいくらやったって、それは信仰になりません。

「だいぶ今日は60％になった。明日は70％になって、いつになったら100％になるか」

なんて、そんな量りかたをしたって、100％にはならない。

キリストがああいうように「尽くし、尽くし」とおっしゃったのを、一言をもって

「托身（たくしん）」

という言葉に託して、この

「中にいれる」

という気合が分かってきたらいい。真理は簡単ですよ。みんな複雑怪奇にしてしまうから、おかしなことになる。実に簡単明瞭です。相手は人間ではないんだから、神さまであり、キリストなんだから、心配ないじゃないですか。なぜ、そういうところへ来ようとしないか。

「いや、私はそれでも、これだけ力があるから。それでも、これだけ知恵があるから」

なんて言って、自分の力だの知恵だの、自分のいわゆる信仰だのを頼っている。そして、青年は

「そんな托身なんていうのはどうも男らしくない。そんなのはごめんだ。もう少し先になって、年をとって力がなくなったら、托身しよう」

なんて思う。ダメですよ、そんなのは。大体、青年なんていうのは、無意識的に、そういう気持でいるかもしれない。だから、なかなか信仰の世界には入らない。

「それでも、力があるじゃないか。それでも、知恵があるじゃないか」

と。そんな「それでも」という知恵も力も全部、これはぶちまけなさい。そうしたら、

「それでも」

どころではない、本当の力になる。本当の知恵になるぞと。これを何万人の青年に私はこの福音のことを、時に臨んで語っても、

「そうかなぁ」

と思うくらいのところで、入ってこない。

「ああ、不信なる代なるかな。いつまで耐え得んや。もう、私は伝道をよそう」

なんてな気持に一面なりますよ。もう伝道なんかよそう。自分は書斎にとじこもって、自分の生涯の課題に没頭したいと。私に委ねられている一つの仕事がある。けれども、この福音をいただいて、私はどんなにそういうように一途になりたくても、「已む得ざるなり」というわけです。

「これを宣べ伝えずば災いなるかな」

とパウロが言ったとおり、

「キリストに棄てられても、人の魂の救いのためには」

という、また別な炎が私の中に燃えてくる。そういった矛盾存在だな。そういうもんですよね、本当の世界というものは。それは、火は燃えざるをえない。

「獅子吼(ほ)ゆ。誰か恐れざらんや。エホバもの言い給う。誰か語り得ざらんや」

「わが骨の中に神の火が燃えるが如くなれば、忍ぶに疲れて、黙(もだ)さんとしても黙すことができない」

とエレミヤも言った。

●一粒の麦

「一粒の麦、地に落ちずば」

とさっき読みましたけれども。私の兄貴が独りで信仰の世界を貫いて――今度の『天路』という文章の始めに書いてある――

「わが家族、わが親戚に救われる者が私ひとりでないように」

と聖書の扉に書いてある。兄が逝ってから私は目が覚めて、信仰の世界に入ったわけでしょ。ま、そんなもんですよ、人生なんてものは。

だから、どんなに失敗いたしましても、どんなに失望いたしましても、なお神の国が勝つことを信じて進んでいく。どうか、皆さんは、そのような絶対不敗の、不退転の、この福音の世界に入れられて――これは冗談じゃないですよ、この世界は――あなた方は本当に大事な一人びとりです、日本の将来のために。何をなさっていてもいい。それだけの信を受けとらなかったら、もうそれは信仰をやめた方がいいかもしれない、「信仰は半分、いろんな策略半分」なんていう人は。

「信ずる者にはすべてのこと為し得られるなり」

とは何とうれしい言葉だ。私はこういうキリストの言葉を聞いていると、何とも言えんです。私自身は実に無力なダメなやつですよ。けれども、キリストを受けとるならば、

「私を受けとってごらん。一切を為しうる」

と。正直、どんな大学者、また大詩人のものを読みましても驚かない。これはキリストの光が、キリストの知恵が、それ以上のことを私に語り給うからです。皆さん一人びとり、そのとおりです。人が認めようが認めまいが、どうでもいい。

「信ずる者にはすべてのこと為し得らるるなり」

と。あなた方は実際、今、生活においてこのキリストの言葉の質を体験しつつあられるでしょ。

「そうだ。とにかく、イエスのおっしゃるようなこの事態が私の中にも動きつつあるから、私はどんな現実に、運命にぶつかってもたじろぎません」

というものが、あなた方の中に既に湧きつつあると私は信じています。それでなければ、この集会に来るわけがない。

●絶信の信

「われ信ず、信仰なき我を助けたまえ」

「どうも、私自身の側の信仰らしい信仰がありません」

と。いいです、このお父さんが言う通りで。自分の信仰なんていうものを数えたり、省みたりすることはない。信仰を私しているような信仰がたくさんある。

「まだ、私は信仰が弱いから、もう少し聖書の勉強をして、また時間がたって強くなりましたら」

なんて。自分の側の信仰なんてものを強くするのしないのと。キリストが

「信仰うすきものよ」

とか、

「信仰弱きものよ」

なんておっしゃるから、

「ひとつ強くなろう、あつくなろう」

なんて思うかもしれないけれども、ああいう言葉に躓かないように。客観的に相対的にみれば、強い弱いということは、ある意味においてはもちろん言えます。けれども、そういうことを自分の側において数えるようなことをしていたら、進まない。むしろ、

「信なきわれ」

ということです。

「私の側の信仰なんてものは当てにならないから、そんなものはもう棄てました。私はもう信仰なんかありません」

と。自分の信仰なんていうものを当てにしているのだったら、それは確信みたいなものだ。そんなものは当てにしない方がいい。だから、「信なき」は――それは「不信」という字ですけれども――

「不信の私を、不信仰の私を」

と、むしろいわゆる自分の信仰に絶する。

「自分の信仰」

なんて、自分の側をたたきつけてしまう。そして、絶信の信。キリストから、神さまから賜るところの信です。この絶信の信に生きようというのが、

「われ信ず、信なき我を哀れみたまえ」

ということ。そういう信仰でもって、このお父さんがキリストに答えた。

「信仰」と言いますけれども、一体何を信ずるんですか。何を受けとるんですか。ルターが、

「信仰は神の業であって、その人をいっぺん殺して、そして新しく活かして、その中に聖霊を降（くだ）すものである」

と言いました。あれは名言です。神の業であるから、

「では、私は何もしないでいいか」

と、そういうものではない。申し上げているとおり、自分を棄てるということは、自分を任せるという業、托身（たくしん）ということが、これが信なんです。托身という信において、神さまの一切を受けとる。それでは、神さまの一切、キリストの一切というものは何かというと、それは神の生命であり、そして、これはどういう生命かというと、愛の生命であり、また愛の力である。内容は愛、恵みです。

エペソ書2章8節のところに、

「汝らは恵みにより、信仰により救われたり」

と書いてある。恵みの方が先ですよ。キリストの恵みによって、そして信仰によって救われた。

「信仰によって義とされる」

とか、

「信仰によって救われる」

とか言うが、それは何を信ずるかというと、恵みです。

「恵みにより信仰により救われた」

とは、

「恵みを受けとることによって救われた」

ということ。恵みを信受することによって救われた。信仰は信受ですから、信受する者は、キリストの恵み、恩恵、「カリス」を受けとる。このカリス、恩恵というものは、

「キリストの恩恵」

というけれども、この「の」は

「キリスト＝恩恵」

ですよ。キリストという恵みです。キリストという恵みそのものを受けとることが信仰の内容だから。信とは即ち「受けとる」という事態ですから、ひとつの器みたいなものだ。そのことは、ブルンナーさんも言っている。器であると。中身は神の愛である。一言でいうならば、「愛」と言うよりか仕方がない。愛でも恵みでもいい。

そこで、いつも引用するところの有名な句はガラテヤ書2章20節のところです。もうこの言葉に言い尽くされている。

「我キリストと偕（とも）に十字架せられたり。最早（もはや）われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

これははっきり書いてある。ガラテヤ書2章20節は、これ以上の答案がないくらいな素晴らしい言葉です。

われはキリストと共に十字架せられた。キリストは、私の自我という「罪」を全部、十字架してしまったから、もはや自分は自我にとらわれない。自我から解放されたものでしょ。それが自由というんだから。クリスチャンの自由とは何かというと、キリストの十字架でもって自我がすっ飛ばされた、そこに生じた事態を自由という。魂が自我という桎梏（しっこく）から解放された。手かせ足かせはどこにあるかというと、自我という自分の中にある。自我というこのしょうがないやつから解放されまして、魂が翼をもって自由自在に天翔（あまがけ）るような事態になる。それが、

「我キリストと偕（とも）に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず」

ということ。今までの自分なんてものは生きてはいない。相変わらず、私たちは生きています。けれども、パウロが言っているのは根源現実です。

「根源現実においてはもう自分は生きていない」

と言うんです。そして、根源現実においては、

「キリストわがうちに在りて生きたもうのである」

と。今、私が生きているのは、キリストが私の中で生きていらっしゃる。そういった、キリストのなした業ですよ。十字架という業。復活によって生命づけるところのこの業。だから、神の業を受けとる、神の業を信受する。この他に信仰があるかということです。信仰の内容は実に、驚くべきキリストの贖罪の事態と、それから復活の生命のそのものです。

内容がないような信仰ではダメです。

「キリストは神の子である。十字架に架かって贖罪をなさった」

という、そういう命題を信じたってダメですよ。事実、

「汝の罪ゆるされたり」

と。我が罪ゆるされたりと。我というやつはすっ飛んでいる。キリストが私の中に生きてありたもう。自分なんか今、どうであろうとこうであろうと、分裂していようが何であろうが、そんなものは問題でない。

キリストの中にある本当の自分というものがなければダメですよね。そうしたらば、

「われ肉体にありて生くるは

なるほど今、肉体にありて自分は生きているよ。

私を愛してわがために己が身を棄てたまいし、贖罪してくださったところの、このキリストを受けとることによって、生きている」

と。もう生命の質がちがう、生きがちがうというわけです。

「信仰はそのような、神の恵みを自分の中に受けとって、入れているものである。」

と、さすがにブルンナーさんはよく掴(つか)んでいます。

コロサイ書1章13節から、

「13父は我らを暗きの権威より救い出して、その愛(いつく)しみ給う御子の国に移したまえり。……15キリストは見ゆべからざる神の形であって、……19神はすべての満ちたれる徳を彼に宿しておられる。」（コロサイ1・13～19）

「9それ神の満ちたれる徳は、プロレーマはことごとく形をなしてキリストの中に宿っている。10汝らは彼にあって満ちたれるのである。」（コロサイ2・9～10）

と。そのようなキリストの一切のものが満ち満ちるわけです。だから、信の世界は実に豊かな内容を盛ることになります。

キリストの力、キリストの愛、キリストの生命というようなものを絶対無条件にそのよ

うな具合にして受けとる。だから、

「**信ずる者にはすべてのことが為し得らるるなり**」

ということは、これは自分が何かすべてを為すのではなくて、この自分という、信仰という器をとおして、キリストがそこでもって一切を為したもう。キリストの力がわがうちにおいて、キリストの光がわがうちにおいて、キリストの愛がわがうちにおいて、ということです。

●キリストの愛の本願

何といっても、信仰の起きるゆえんのものは、キリストの愛に感じなければ起きない。いくら

「信じろ」

なんて言ったって。この福音書において、またパウロの書簡でも何でもいいですが、いかにキリストが私たち一人びとりを深く、自分を投じてまでも愛してくださっていることか。

「愛している」

ということは、一切を私に、皆さん一人びとりの中に、その内容として入れようとしておられることか。

「私はお前の中に入って本当に力となり、生命となり、愛となり、光となりたいんだ」

という、キリストの本願です。事実の裏付けをもってするところの、キリストの愛の本願というものに感じてきたらば、信仰はおのずから湧いてくるんです。そのようなキリストの愛を本当に自分に受けとるというのは、どこで受けとるか。祈りの世界です。だから、祈りのないところには、一切のことは本当は始まらない。どんなに聖書研究会を何回やったって、祈らなければダメです。

皆さんが日常生活でいろんなことにぶつかって、この祈りの場に入らなければダメですよ。考えたって、思案したって、研究したって、それはダメです。祈りの世界に入ったら、そこが解決ならざる解決をもって進んでいく。その時に即決できなくたって何だっていい。必ずその奥の世界から、この祈りをとおして道は開かれていく。何となれば、祈りにおいて受けとるものはキリストそれ自体なんだから。何かこちら側のお願いではないんだ。そうすれば、お願い以上の、悲願以上の、キリストの霊願が、本願がかかってきて、そしてその道を開いてくださる。行き詰まりをしらん。

「**為(せ)んかた尽くれども希望(のぞみ)を失わず。倒さるれども滅びず**」

とパウロが言っているのは、そのことです。

「一切のことを為し得る」

という驚くべき事態です。

「信ずる者には一切ができる」

という。この「信仰万能」というのは、信仰それ事態が、内容が凄いから万能となるのであって、我々の信仰がただ万能だという、そんなような妙な狂信的なことを言っているのではない。いわゆる

「信仰さえあれば何でもできる」

と言って、人間の側の信仰というものに凝り固まったようなものではない。もう、楽なものです。

「信仰なんかありません」

というような信仰ですから。

●信楽

キリストを受けとるこの信の世界が万能である。親鸞はそれを「信楽」と言った。やはり昔の坊さんはえらいね。信仰なんて言わずに「信楽」だと言う。私が福音のことを「楽音」なんて言ったけれどもね。信楽という。

「信楽というは即ち、これ如来の満足、大悲、円融、無礙の信心海なり」

という。渺茫たる非常に豊かな事態ですね。それだから「信楽」という。

「即ち、利他廻向の至心をもて信楽の体となすなり」

他人を利する。他人のためにする。ペスタロッチの言葉に、

「一切は人のため。自分のことは何も思わず」

とある。それが「至心」であるという。「利他」とは、人を愛することですね。そのように心を向けているところの心が本当の至心である。こないだ、「至誠」ということを私は言いました。本当の生きる人はそのような生き方です。

蓮如上人の言葉に、これは浄土真宗の方ですが、

「弥陀のかたより、頼む心も尊やありがたやと念仏する心も、みな与えたもうゆえに、とやせんかくやせんと図ろうて念仏もうすは自力なれば、嫌うなり」

という言葉がある。とやかくといって念仏することはない。みなこれは弥陀のかたから来るところの信心であるという。キリストの信ということです。やはり、極致の体験をしている人はみなそういう角度の体験をしているわけですね。そのように圧倒的なんです、恵みは。恵みは圧倒的で、私たちを活かせずんばやまずということ。

「どんなことがあっても大丈夫だよ」

と、上からやって来るところのこの驚くべき生命、驚くべき愛、驚くべき光に浸透されるためには、自分を投げ棄てたような祈りの世界に入る。それが本当の信仰万能の事態なんです。イエスは本当に神の懐の中に入って、またそこにおいて生きていたから、このような驚くべき実存であった。

「とにかく、その質をどうして受けとってくれないか。ああ、信なき代なるかな」

と。キリストが「信」とおっしゃったのは、

「なぜ、そのようにして受けとりませんか。自分の信仰がどうかなんて言っているのではありませんよ」

という意味なんです、キリストのこの「信なき代なるかな」の「信」とは。

「まだ分からんかね」

と、キリストはもう愛想をつかしてしまった。

そこで弟子たちがダメなんだ、みんな。癲癇がどうにもならないものですから。それは

「問題は自分の側の信仰だ」

なんてやっているからいかんと、こういうわけです。イエスはそれでどうなさったかは、その先だ。

●聖名によって命ずる

25イエス群衆の走り集るを見て、穢(けが)れし霊を禁(いまし)めて言いたもう『唖(おうし)にて聾者(みみしい)なる霊よ、我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』

はっきり、霊に命じられた。

26霊さけびて甚(はなは)だしく痙攣(ひきつ)けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言う。

死んでしまったと思った。放っておけば、実際、冷たくなる。けれども、キリストが手をおいて、聖霊の生命を入れたもうわけです。

癲癇ではありませんでしたけれども、かつてちょっとそれに似たことを私も経験したことがある。そこはどこまでも、私たちは

「キリストの聖名(みな)によって命ずる」

と言って、聖名によって息を吹き返させる。直接的には私たちにはできない。いつもそこに、

「キリストの聖名によりて」

ということをはらわたの底から言わなくてはいかん。

27イエスその手を執りて起こし給えば立てり。

支配していた悪い霊が出ていってお留守になってしまったから、イエスは、今度は本当の神の霊をそこに吹き入れる。キリストを通してそれが入ってくるわけです。

28イエス家に入り給いしとき、弟子たち窃(ひそか)に問う『我等いかなれば逐い出し得ざりしか』

「どうして逐い出すことができなかったのでしょうか」と。

29答え給う『この類(たぐい)は祈に出(よ)らざれば、如何(いか)にすとも出でざるなり』

あるいは、

「祈りと断食によらずば」

と書いてあります。

「断食するほどの祈り」

と言っても構わないわけです。本当の祈りの世界は、深く祈ってきたら、もはや寝食を忘れたような世界です。

私は、この祈りの世界がとにかく体験されるまでは、ご飯を一度抜けば何か力がなくなるように思ったけれども、今はそういうことはない。食事を抜こうが何ともない。むしろ、却って食は少ない方がいい。そして、深く祈れば本当の力が出てくる。深く祈り、神の霊を深く宿し、そして神の御力に、御霊に満ちる。本当に御霊を宿していなければ、癲癇を引き起こしているような霊に勝つことができないから、それで言われたわけです。

●祈り心地

大事なのは、たとえそのような長い深い祈りの時間がなかろうとも、我々は日常、電車の中であろうとどこであろうと、魂が祈り心地であるということが極めて大事なんです。魂が祈り心地であれば、咄嗟（とっさ）の場合に直ぐその祈りの深い態勢に入って、直ちに神の力がそこで働き、キリストの力が働いてくださる。魂が祈りの態勢からお留守になったら、それはダメです。大事なことは祈り心地、祈り心というものを常に持っていることです。

「祈り心」

と言ったって、難しいことではないですよ。霊的な、キリストに深く親しんでいる心です。何かおそれていたらダメです、あるいは畏（かしこ）まっていても。深く親しむんです。キリストに深く親しみ、本当に自分はキリストの生命に、愛に浸っているような親しみをもっているときに、そういった魂の質に、心の質になってきます。

人間というものは、くだらない自我というものが段々抜けていくわけです。そうしたらば、キリストとの連携がしょっちゅうとれているわけですから、それが本当の祈り心です。

事にぶつかってうろたえたりすることがない。常時信仰の心が、常時祈り心であることが極めて大事です。

「信ずる者にはすべてのこと為し得らるるなり」

と。普段いい加減にしていて、

「さぁ、私は信じよう」

なんて、それはダメなんです。やっぱり、常時が大事です、常時の心の態勢が、向きが。即ち、磁性をしょっちゅう帯びていないと。いきなり摩擦して、磁性をかけようなんてダメなんです。普段から信仰的磁性をちゃんと帯びて、常時、自分という磁石はキリストを指している。キリストに引きつけられているような存在である。これが本当の信の事態である。しからば、いろいろなことが出来ましても、その時に本当に、

「主さま！　あなたが一切に勝ちたもう。あなたが一切を担いたもう」

という、この

「主さま！」

と言うところにおいて、いざというときに本当にはらわたの底から祈りかかって、そしてまた、権威ある声をもって、悪霊がいたら追い出すこともできるし、病にある人を助けることもできるというわけです。

この霊光に貫かれ、霊光を本当に宿す。さきほどの親鸞や蓮如の言葉ではないが、それが本当の「信楽」の世界である。信仰はまことに信楽の、ゆとりのあることであって、「信ずる者にはすべて為し得られる」ということは、即ち、信仰のないところは一切がダメになっていく。キリストを受けとるところには、キリストの愛を受けとるところには、一切が展開していく。そこで、

「信ずる者にはすべてのこと為し得らるるなり」

とのキリストの裏付けをもったはっきりした宣言、これを私たちの本当の力にしていきたいというわけです。

ブルンナーさんの言葉はなかなか、そういうところが非常に強い。

「自分自身において起こさしめる、このキリストの救いの行為――救いの行為を我自身において、それ自体において起こさしめる――これが信というものである」

と。正にその通りです。

「キリストの救いの行為、救いの力ある行為をわがうちにおいて起こさせ、また我を通して起こさせるところのもの、これを信と言う」

と。どうか、皆さん、そういうわけで、マルコ伝９章のこの癲癇において、私たちはどのような事態にぶつかっても、この

「信ずる者にはすべてのこと為し得らるるなり」

というキリストを信じていきましょう。いつかもお話した通り、私は呪われている人を助けたことがありますが、それはただキリストに、

「主さま、あなたが救ってください」

と言って祈った。キリストは一切のものよりか力強いんですから、相手がどんな霊的な現象でも決して恐れることはない。恐れたらダメですよ、恐れたり、疑ったりしたら。自分が、

「自分の信仰」

とか何とかいって、

「これに勝とう」

なんていうのではない。キリストが勝ちたもうのだから、何をか恐れんやと。信仰の世界では、恐れや疑いは禁物です。何となれば、キリストは最高最強の、また最大の力ある主ですから。どうか、皆さん、その点で、大きな太い線の魂になっていただきたいと、こういうわけです。ではおしまい。